

薬剤部 DI ニュース

あらかじめ混合されていない複数のワクチンの同時接種について

複数のワクチンを接種する機会があるのは、小児の予防接種や、成人においては仕事などでの海外渡航のために複数の予防接種を渡航前にすることがあります。当院においても渡航前の予防接種依頼が年に数件あり、今回 DI ニュースとして紹介します。

あらかじめ混合されていない複数のワクチンの接種は、不活化ワクチン及びトキソイド接種の混合は 6 日以上、生ワクチン接種の場合は 27 日以上の間隔をあけて次のワクチンの接種を行う、ただし、医師が必要と認めた場合には、同時接種することができる、とされています。

以前の予防接種実施規則においては、副反応が起きた場合、各ワクチンの原因責任を明らかにするための分離政策として、他ワクチンとの同時ないし、1 ヶ月以内の連続接種を禁忌としていましたが、予防接種法改正によりワクチンの同時接種は医師の判断で実施可能となりました。現在、予防接種ガイドライン 2011 年版や定期(一類疾病)の予防接種実施要項において、「二種類以上の予防接種を同時に同一接種対象者に対して行う同時接種は、医師が特に必要と認められた場合に行うことができる」と明記されています。

なお、同時接種に当たっては、混合して接種してはならず、また同一部位に接種するのを避けて、別々の腕に接種することが望ましいとされています。

<参考>

○「日本小児科学会の予防接種の同時接種に対する考え方」 http://www.jpeds.or.jp/saisin/saisin_1101182.pdf

日本小児科学会は、ワクチンの同時接種は、日本の子供たちをワクチンで予防できる病気から守るために必要な医療行為であると考えます。

尚、同時接種を行う際、以下の点に留意する必要があります。

- 1) 複数のワクチンを 1 つのシリンジに混ぜて接種しない
- 2) 皮下接種部位の候補場所として、上腕外側ならびに大腿前外側があげられる。
- 3) 上腕ならびに大腿の同側の近い部位に接種する際、接種部位の局所反応が出た場合に重ならないように、少なくとも 2.5cm 以上あける。

<海外における複数のワクチン同時接種について>

海外では広く同時接種が行われ、いくつかの組み合わせにつきその安全性と有効性に関する知見が蓄積されています。RedBook2003 において、複数ワクチンの同時接種について、「乳児や小児に定期接種のワクチンとして推奨されているワクチンに関しては、複数ワクチンを同時接種することは禁忌ではない。一般に一つのワクチンに対する免疫反応が、他のワクチンの免疫反応を干渉することはないが、例外としてコレラワクチンと黄熱ワクチンを同時あるいは 1-3 週間間隔で接種した場合に、免疫原性が減弱する。同時接種を行う際には、別々の注射器を使用し異なる部位に接種すべきであり、同一肢に注射する場合には局所反応がどのワクチンによるものかを鑑別できるように接種部位を少なくとも 1 インチ(2.5cm)離すべきである。個別のワクチンは、同一注射器を使用しての接種が特別に認可されている場合を除き、決して注射器内で混合すべきではない。」とされています。

米国では 2 ヶ月児の予防接種において 6 種類のワクチン(3 種混合+Hib+小児用肺炎球菌+不活化ポリオ+B 型肝炎+ロタウイルス)が同時接種されているのが実情です。

(砂田)